

## 日本の観測所めぐり (3)

### 京都大学飛驒天文台

飛驒天文台(岐阜県吉城郡上宝村蔵柱)と花山天文台を含めて京都大学理学部附属天文台と呼んでいる。昭和30年代になって花山天文台がある山科地区の都市化が急激に進み、より良い観測条件を求めて昭和43年に飛驒天文台が建設された。

飛驒天文台の最大の特徴は、青く澄んだ静穏な大気のもとにドームレス太陽望遠鏡(写真)があることである。この望遠鏡は、地上観測で望みうる最高の空間分解能が達成できるように特別の設計がされており、世界でも屈指の性能を誇っている。この望遠鏡の稼動以来、今迄わが国では得られなかったような高分解単色太陽像が撮影されるようになり、太陽活動現象の微細構造について多くの新事実が解明されてきた(天文月報1982年7月号川口市郎氏と1984年6月号黒河宏企氏の記事参照)。この望遠鏡には、波長域は狭いが波長分解能が高い垂直分光器と、全波長域での同時撮影が可能な水平分光器が装備されている。単色像観測と分光観測によって、フレア・プロミネンスなど太陽活動現象のメカニズムと特性を電磁流体力学的に明らかにする研究と、光球や彩層でのものの流れと磁場に起因する微細構造の温度・圧力・速度場など物理状態を調べる研究が行われている。ドームレス太陽望遠鏡のユーザーは単に京都大学の研究者だけでなく、国内および海外の他機関の研究者にも及んでいる。

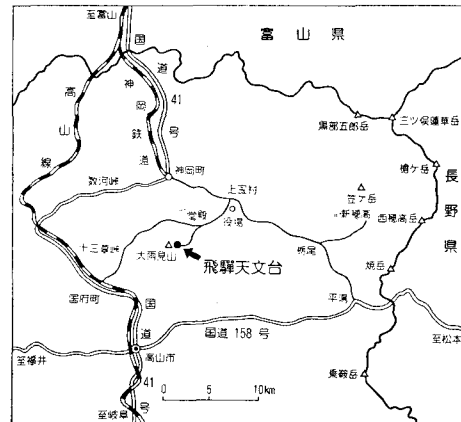
飛驒天文台には夜間観測用の65cm屈折望遠鏡と60cm反射望遠鏡がある。これらは主に火星・木星など惑星の表面模様の観測や彗星の写真観測に使われている。特に、2年毎の火星の接近時には火星面での四季の変化や高い山にかかる雲の発生などの常時観測が行われている。また、昨年8月からはハレー彗星の写真観測にも使われている。

飛驒天文台への道順は、高山線高山下車、駅前から濃飛バス本郷経由見座行(日に1便)約1時間で堂殿下車、その後は未舗装急勾配の山岳道路(天文台専用道路)6kmを登って天文台に達する。

個人による天文台の見学については、原則としてお断りしている。学校関係など団体による教育研修を目的と



ドームレス太陽望遠鏡。背景は乗鞍岳である。



する見学については、前以って天文台に電話(0578-6-2311)連絡して頂ければ、観測機器の説明など簡単な見学の案内をしている。なお、天文台道路は冬期間(11月-4月)積雪のため普通の自動車での通行は不能となるので、見学は遠慮して頂きたい。(神野 光男)

昭和60年2月20日 発行人 〒181 東京都三鷹市東京天文台内  
印刷発行 印刷所 〒162 東京都新宿区早稲田鶴巻町565-12  
定価 450円 発行所 〒181 東京都三鷹市東京天文台内  
電話 (0422) 31-1359

社団法人 日本天文学会  
啓文堂 松本印刷  
社団法人 日本天文学会  
振替口座 東京 6-13595